

特54
152

天

下
之

身

目

敬啟者



新聞記者奇行傳

初編

隅田了古編輯
鮮齋永濯畫圖

肖像
載錄
詩歌

墨々書屋梓



凡例

先哲ノ履歷ヲ著ス史籍ハ世ニ多ク現在ノ人ノ傳ヲ述ル者ハ甚
稀ナリ古人曰ク棺ニ蓋シテ事始テ治ルト真ナル哉現存人ノ傳
ハ未來ヲ知ル能ハサル而已ナラズ誤謬アレバ必ず咎ヲ陰事ヲ訐ケバ
必ず憤ル故ニ其履歷ヲ述ケル最モ難シ余明治十二年ノ秋ヨリ新
聞記者奇行傳ヲ著サント欲シテ漸々ニ草稿ヲ作ル人アリ見テ曰ク
足下新聞記者諸君ヲ識テ此書ヲ著スヤト答テ曰余ハ鄙野ノ少年
ニシテ交際最モ狹ケレバ一名ノ知己ナシ是則余ガ奇行傳ヲ著ス所
謂ナリ知己アレバ必ず忌憚ル所アリテ依怙ノ論ナキヲ保セズ此ニ載ル
所ハ余ガ陰ニ探知スル所ナレバ誤聞ナシト云ベカラス誤聞ヲ危ブミ

テ廣ク世人ニ質問セバ必ずヤ記者ノ知己アツテ筆ヲ下スニ自
由ヲ得ズ依テ余ハ傳聞ノ僂ニ記スノミ看客閱シテ誤謬甚シ
キ者アラバ拙家ニ書ヲ投ジテ明示サレヨ得ルニ從テ改正ス
ベシ

卷中ニ出ス肖像ハ素ヨリ一面識モナキ君等ナレバ其容
貌ノ似ルヤ否ヤニ関セズ畫工ノ想像ニ任スノミ而シテ諸
君ガ今日ノ服裝ヲ画カバ或ハ洋服或ハ袴ヲ履ツノ他
ナカルベキヲ少年ノ時ヲ寫シ半髪ノ体ニ作ルハ一様ニ
シテ看客ノ眼ニ倦ヲ厭ガ故也譬ハ卷頭ノ福地君ガ禮
服ハ明治ノ初年大藏省出仕ヲ拜命セラル、体ヲ寫シ

沼間君ハ戊辰ノ役奥羽ノ戦地ヲ往来スル体ヲ描クガ如キ
以下總テ此例ニ倣ヒ小傳ヲ画圖ニ引合セテ知リ賜ヘ
今日新聞ノ行ハルヤ各府縣下ニ至テハ數百名ノ記者アル
モ丁數限リアレバ一編ニ載難キヲ以テ輦下ニ有名ナル記者ト
雖モ履歷ノ詳カニ探知シ得ザル者ハ後編ニ譲ルニ編三編
ニ至ツテハ獨各社員ノミナラズ大小新聞ノ投書家諸
君ノ小傳ヲモ掲載セント欲スレバ乞フ其詳細ナルヲ記
シテ寄贈サレナバ幸ヒ甚シ矣

明治十三年十二月

隅田了古記

初編目次

○新聞記者奇行傳

- 福地源一郎君
- 關新吾君
- 藤田茂吉君
- 甫喜山景雄君
- 前田健次郎君
- 宇田川文海君
- 田島象二君
- 栗本鋤雲君
- 津田仙君
- 沼間守一君
- 岡本武雄君
- 岸田吟香君
- 山脇巍君
- 末廣重恭君
- 忍峽稜威兄君
- 中島勝義君
- 高島藍泉君
- 成島柳北君

○通計十八名

福地源一郎

題畫

潮頭月湧

渚烟收

兩岸蘆花

夜繫舟

一醉夢回

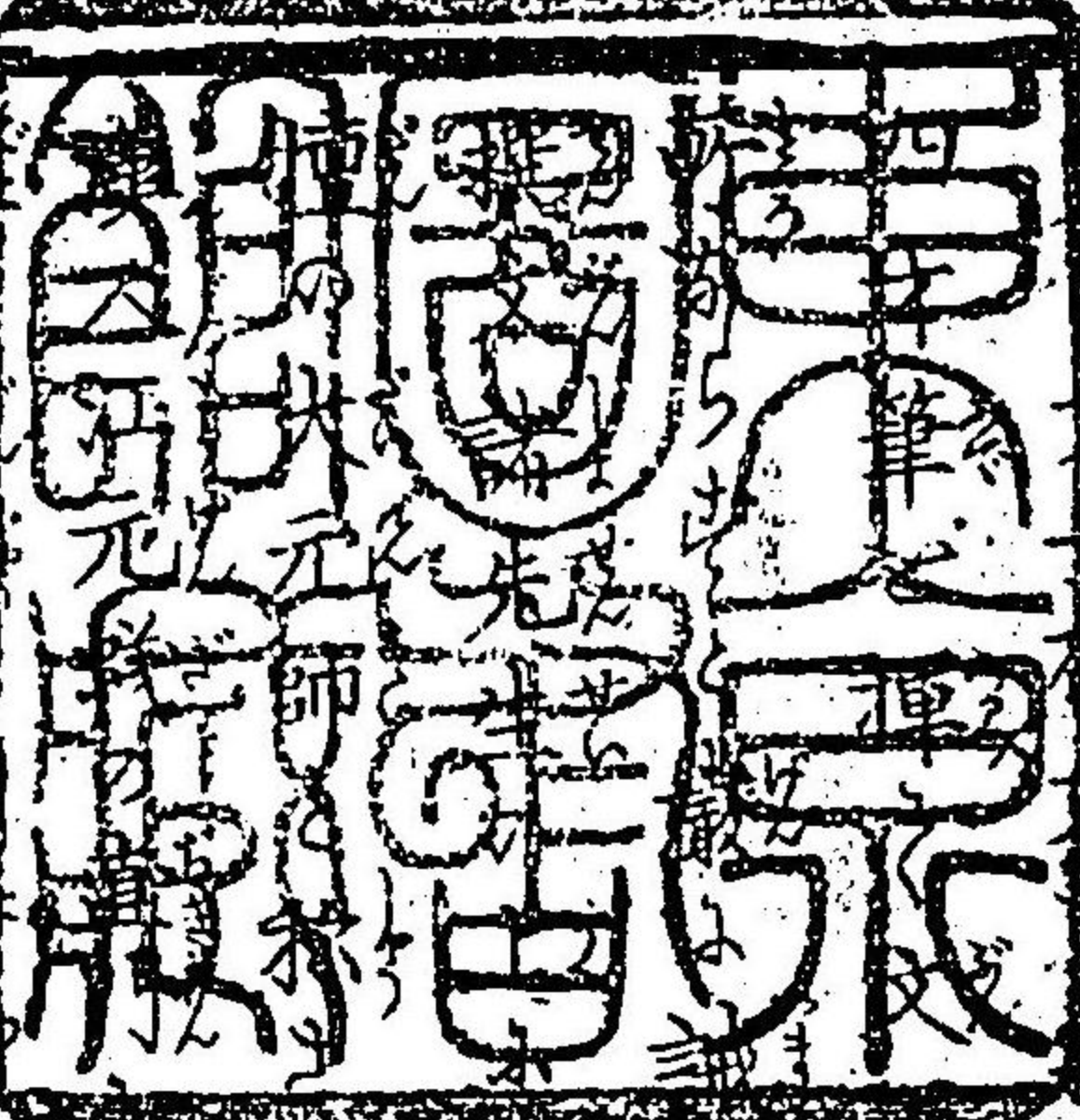
人不見

白鷗飛過

滿江秋

居所 下谷池之端茅町三丁目十六番地 名八萬世号櫻痴居士又夢の屋

京橋區張町壹丁目 東京日々新聞社長



肥前長崎の産なりて幼年より天稟の奇才ありき神童と称せり當時未
 船乃漢人某氏奇陽子と物古せし境と港内を建立し同地を在り時
 以て投標し其可なりと舉て石刻せんとし時小君十
 作らざる父君之と見て此投標ハ小童は黙きよりた
 ららき一が又思ふ所ありて之と許せし果し君の
 出ると以て舉て碑面を刻たりと實は後年文
 師の元師と仰がりの英才驚くべし書
 如く尋常の撰家及ぶ所あり安政六年東都へ出て蕃所調所
 小入る蘭英佛の三學と研究し忽ち拔擢せらるる幕府の拜謁以上
 小列そ戊辰の春幕府錦旗を抗し征討使関東へ下るる臨み帰農し
 て黙きよ江湖新聞と編輯を文中行政上よ害ありの廉と以て辰の

口々 新聞記者が禁獄の権輿と云ふ
 其後湯島妻戀坂下ふ英佛學の私立校を開き、
 慶應義塾ふ併立するの勢ひあり、
 出仕ふ補なき翌年伊藤博文公ふ隨從、
 行および各會社設立の事ふ盡力なきたり、
 昭報社長と成り大に談社の聲價を増ふ至る君ハ文才
 小富のこあらば理事經濟ふ長トたるを以て東京府會
 議長ふ撰擧なき又商法會談所。横濱取引所。樂善會
 福田會。博愛社等の幹事たり餘暇何きハ天下第
 一風流の才子とみづから任トす 新柳二橋或ひを南北の
 青樓ふ春夢と買ざる夜ハ稀ナリと故人曰豪傑ハ色を好む
 と是の謂歟

沼間守一

發庄内

合縱總作
 又連橫
 無限恨生
 無限情
 二十四郡
 爲虜有
 未者河北
 顏真鄉



居所 今川小路二丁目拾五番地
 号 弄花生 又不二樓主人

京橋區西紺屋町
 東京横濱毎日新聞社長

歷代幕臣（一）、舊名（二）、真次郎（三）、本姓（四）、高梨氏（五）、安政六年（六）、十五才（七）、長
 等（八）、遊（九）、比（十）、泰西（十一）、乃（十二）、兵學（十三）、志（十四）、佛式（十五）、の（十六）、練法（十七）、熟（十八）、砲兵（十九）、の（二十）、指令（二十一）、官（二十二）、が（二十三）、
 一（二十四）、が（二十五）、戊辰（二十六）、の際（二十七）、官軍（二十八）、江戸（二十九）、入（三十）、る（三十一）、臨（三十二）、む（三十三）、ど（三十四）、麾下（三十五）、数万（三十六）、の（三十七）、士（三十八）、恭順（三十九）、抗戰（四十）、の（四十一）、両
 論（四十二）、決（四十三）、せ（四十四）、と（四十五）、多（四十六）、と（四十七）、君（四十八）、憤（四十九）、發（五十）、し（五十一）、
 抗戰（五十二）、の（五十三）、有（五十四）、志（五十五）、と（五十六）、劬（五十七）、ま（五十八）、と（五十九）、せ（六十）、し（六十一）、も（六十二）、成（六十三）、を（六十四）、遂（六十五）、小（六十六）、奥（六十七）、羽（六十八）、不（六十九）、脱（七十）、し（七十一）、屢（七十二）、々（七十三）、官（七十四）、兵（七十五）、と（七十六）、惱（七十七）、ま
 の（七十八）、勇（七十九）、畧（八十）、あり（八十一）、し（八十二）、が（八十三）、各（八十四）、隊（八十五）、一（八十六）、般（八十七）、帰（八十八）、順（八十九）、の（九十）、後（九十一）、更（九十二）、小（九十三）、板（九十四）、垣（九十五）、退（九十六）、助（九十七）、君（九十八）、不（九十九）、聘（一百）、せ（一百一）、ら（一百二）、れ（一百三）、し（一百四）、土（一百五）、藩
 小（一百六）、練（一百七）、兵（一百八）、と（一百九）、傳（二百）、習（二百一）、し（二百二）、明治（二百三）、五年（二百四）、大（二百五）、藏（二百六）、省（二百七）、不（二百八）、出（二百九）、仕（三百）、し（三百一）、司（三百二）、法（三百三）、省（三百四）、不（三百五）、轉（三百六）、ト（三百七）、洋（三百八）、行（三百九）、帰（四百）、後
 元（四百一）、老（四百二）、院（四百三）、の（四百四）、書（四百五）、記（四百六）、官（四百七）、と（四百八）、拜（四百九）、せ（五百）、し（五百一）、が（五百二）、同（五百三）、察（五百四）、河（五百五）、津（五百六）、君（五百七）、と（五百八）、論（五百九）、の（六百）、合（六百一）、ご（六百二）、多（六百三）、し（六百四）、し（六百五）、職（六百六）、と（六百七）、辞（六百八）、し
 て（六百九）、嚶（七百）、鳴（七百一）、社（七百二）、と（七百三）、起（七百四）、し（七百五）、東京（七百六）、府（七百七）、會（七百八）、副（七百九）、議（八百）、長（八百一）、不（八百二）、撰（八百三）、舉（八百四）、せ（八百五）、ら（八百六）、ま（八百七）、て（八百八）、正（八百九）、確（九百）、の（九百一）、談（九百二）、論（九百三）、不（九百四）、世（九百五）、人（九百六）、の（九百七）、名（九百八）、
 望（九百九）、と（一千）、得（一千一）、たり（一千二）、君（一千三）、偶（一千四）、演（一千五）、説（一千六）、會（一千七）、場（一千八）、不（一千九）、臨（二千）、む（二千一）、を（二千二）、雄（二千三）、辯（二千四）、と（二千五）、振（二千六）、つ（二千七）、ぎ（二千八）、聴（二千九）、衆（三千）、堂（三千一）、不（三千二）、滿（三千三）、て（三千四）、立（三千五）、錐
 の（三千六）、地（三千七）、乃（三千八）、も（三千九）、不（四千）、至（四千一）、る（四千二）、實（四千三）、方（四千四）、今（四千五）、無（四千六）、比（四千七）、の（四千八）、民（四千九）、權（五千）、論（五千一）、者（五千二）、と（五千三）、つ（五千四）、ま（五千五）、へ（五千六）、

関新吾

送友人歸東京

邂逅相逢

無限情

暫歡未盡

別愁生

薰風昨夜

墨江夢

夢路先君

到武城



居所 京橋區銀座四丁目十五番地 前大坂本町三丁目
 名八新号黄蕨野史又自由郷主人 大坂日報編輯人

備前岡山藩士として代官の職を奉じた。開外三氏の男初名孝太郎と称す。木藩の學事の盛衰に依り君幼少より學校に入り歴史と好む。教授と受ふる。一と聞て方と知の才あり。夙く洋學を志し日本魂と主張する。頑士と説諭し開化を進まむ。明治七年廿才にて輦下へ來り旅舎に在り各新聞社に投書せしより芳名世に顕き。東京曙新聞社に入り兵論新聞社に入り過激論を吐露し條例に觸り禁獄一年の處分を受く。既し大坂日報社に招ききての後時、岡山縣旧參事西毅一君書と寄て君が文章を嘆美し岡山に談人何より他を誇る不足りと真あり。君當時坂地に於て君及び平野萬里津田貞の三氏と指り三才子と稱する。明治十三年三月元老院の召し應じ月給八十円を領す。

岡本武雄

留別 一聲瀟瀟 留還 我將還 水帶愁容 亦閑 緬想京城 亦閑 秋雨夕 夢魂 筑波山



居所 京橋區山下町十三番地 京橋區銀座四丁目 曙新聞朝陽社社長 号 不詳

社説の過激なるを以て大に世評を得、本社が今日の榮譽は君が功勞ふ
 出た所なり初め勢州衆名の藩士中村某の養子となり戊辰の役同藩敷
 名と海路と脱して越後長岡に至り屢々官兵に抗戦を或は参謀西郷
 隆盛君深夜に來つて陣營を襲ふ會一流弾の爲に微傷を蒙るも尚不
 屈せざして憤闘し遂に官軍を退却せしめ勇氣豪邁せしめ諸国の脱兵
 悉く帰順せしむ依り一度囚獄に繋ぎ放免の後左院に出仕し又水澤縣
 の吏員たりしが自論の行いささかを以て職を辞し東京曙新聞に入し
 時に該社微々として甚だ困難なりしと君社長の任を擔ひて明治十
 三年大に改革し更不同新聞第一號より発兌し紙幅を廣げしより許
 多の編輯人交りし激論を吐き禁獄罰金の処刑を受るとり
 無敵なり

藤田茂吉

過筑後川
 春光滿野
 柳生烟
 雨後崖低
 筑後川
 想起墨江
 舟裡趣
 絃歌聲湧
 落花邊



居所 西国薬研堀町 日本橋區西国薬研堀町
 号 鳴鶴 郵便報知新聞主幹

奇丁傳

大分縣士族より佐伯の人本姓林氏夙に慶應義塾に入り漢洋の學を修
 一 同塾生の金満家矢野文雄君に愛され大に學費を助けられた
 伴ひて報知新聞記者となり旧酒田縣令三島君の燦行と記載し禁獄二月
 罰金二百円の処刑を蒙り放免の後同社の主幹と成て巨額の月給を納め新橋
 の歌妓お豊を娶り芝佐久間町に美宅を求め驕恣目と追々増長し高慢の
 鼻擧ぐごのらごらの聞えらるる師福沢諭吉君に誠められしより慶應義
 塾に出入する時の木綿服を着用せし偶豆州熱海の温泉に遊ぶ中
 居宅に火つけ家財悉く烏有に属せ古來自火放火に關らば火元の家於
 ては焦土に圍ひせざるに東京の癡習を君知して仮に柵を修せ近隣の類
 焼人怒り其柵を破毀し口を極め罵詈雑言を依り同地に住むべからざるを量り居て
 本社の近傍に移し君親友と酒樓に登り酔後必し妻君傳習の手踊とやら
 舞技最も妙しく論文を作し優くとりし

岸田吟香

ねまりの波

たぐれたまき

後一舟抄

かまゆの巻

をばつと

賢翁



居所 京橋銀座二丁目壹番地
 名八国華号賣葉翁又樂善堂

前東京日々新聞印刷人

美作國中并加の正里岸田秀二君の男、く祖先ハ石田治部少輔三成の落胤、
 うと世に憚り、岸田と改む若年三州奉母の藩士となり、江戸に來り、まゝ内藤家
 に入仕、後藤藤森恭助先生の塾頭と成り、國書と加藤野雁の學び、江戸近國を遊
 歴し、櫻井銀次と稱し、書画の作り兼り、骨董を賣り、俠客博徒と交り、
 銀公くと稱せられたりと、後年吟香の字を換り、慶應年間横濱に留り、米人
 平文氏と和英對訳辞書の篇纂と助け、大財を獲り、上海に遊び、漁船を買來り、
 て江戸横濱間の運輸を開き、明治六年日報社の記者と成り、通俗の文章を振ひ
 し、より各新聞雜報の体裁を一變せし、君が快筆を倣ひ、近日家傳の精銚
 水と賣り、巨萬の富をあり、海外に支店と設け、盲啞と教育する樂善會を築地に開
 き、尊ら慈善と事し、君が肥大より、髯の蓬々たるを、視て、皆外谷と怪す、
 君が、曾て横濱に在り、藻塩草と題し、雜誌を篇輯せし、と、沖津波乃
 歌、詠まじりたり。

甫喜山景雄

失題

二百里程 郷夢餘
 雲中頗稱 是繁華
 秋風不為 鱸炙贍
 御宿松江 城外家

居所 京橋區西紺屋町九番地
 号 東凌又自我刊我書屋

東京日々新聞編輯人



聖武天皇の天平二年より武州荏土の鎮守と崇了神田大神の崇寄村より元
 和二年今の湯嶋に移る神官の代々崇寄氏なり而して南喜山氏之み次
 維新の際其職を退りて文部省に奉職し明治七年日報社編輯人著者名
 岸田君と共に盡かし同十一年大坂日報社人のみとて上阪
 同社の編輯を助け大に聲價を得たりと云ふ君青年より詩と好む大沼枕山
 翁の門に入り佳作多しと同十二年日用草紙と云ふ新聞と著し又近日奇書
 珍籍の火災に罹り或の紙魚の巢と云ふ以憂ひ永世保存の爲に活
 版を以て再刊し同好の有志を募り其の良法を設けしより数
 百里外より郵書で寄て請求する者あり秘蔵の珍書と貸與
 するものあり之が爲に秘書乃世に知らせし鴻益最も
 寡しとせば自我刊我書屋の号に此の事業と起さしめし
 なり

山照巍

客舍聞子規

醉夢醒來

夜四更

燈光明滅

易傷情

杜鵑不識

歸思切

月色朦朧

三五聲



居所 大坂島町三丁目四十一番地 前大坂京町堀通壹百
 号 旭水漁史 朝日新聞主幹

備前岡山の医師某氏の末男幼名を卯吉といひ天性の英才あつて幼
 時の遊戯尋常の小童の如く知らず明治七年十八才ふりて関
 新吾君と共に東京へ或る私塾に入り又兵論新聞記者と成る
 一年の禁獄に処せらるる満期の後大坂へ遊びに來り大坂日報の持主
 西川君社長平野君と隙を生じ平野君が煽動に従つて社員一名を出
 頭せざる困難に際し君談社の倒れんとするを歎て一面識を以て西
 川君を助け突然日報社に來つて社説雜報翻譯に至るや單身
 小擔を紙上と堆む其義氣財力想ふべし後朝日新聞の主幹と成て
 大任を擔ひ功成名遂と明治十三年十月同社を辭し去て岡山縣士族の
 爲に授産の道を開かんとして出京し大に盡力せらるるといふが成功
 の日果しと近きものありべし

前田健次郎

紅雲散

蝶よりも花よりハ

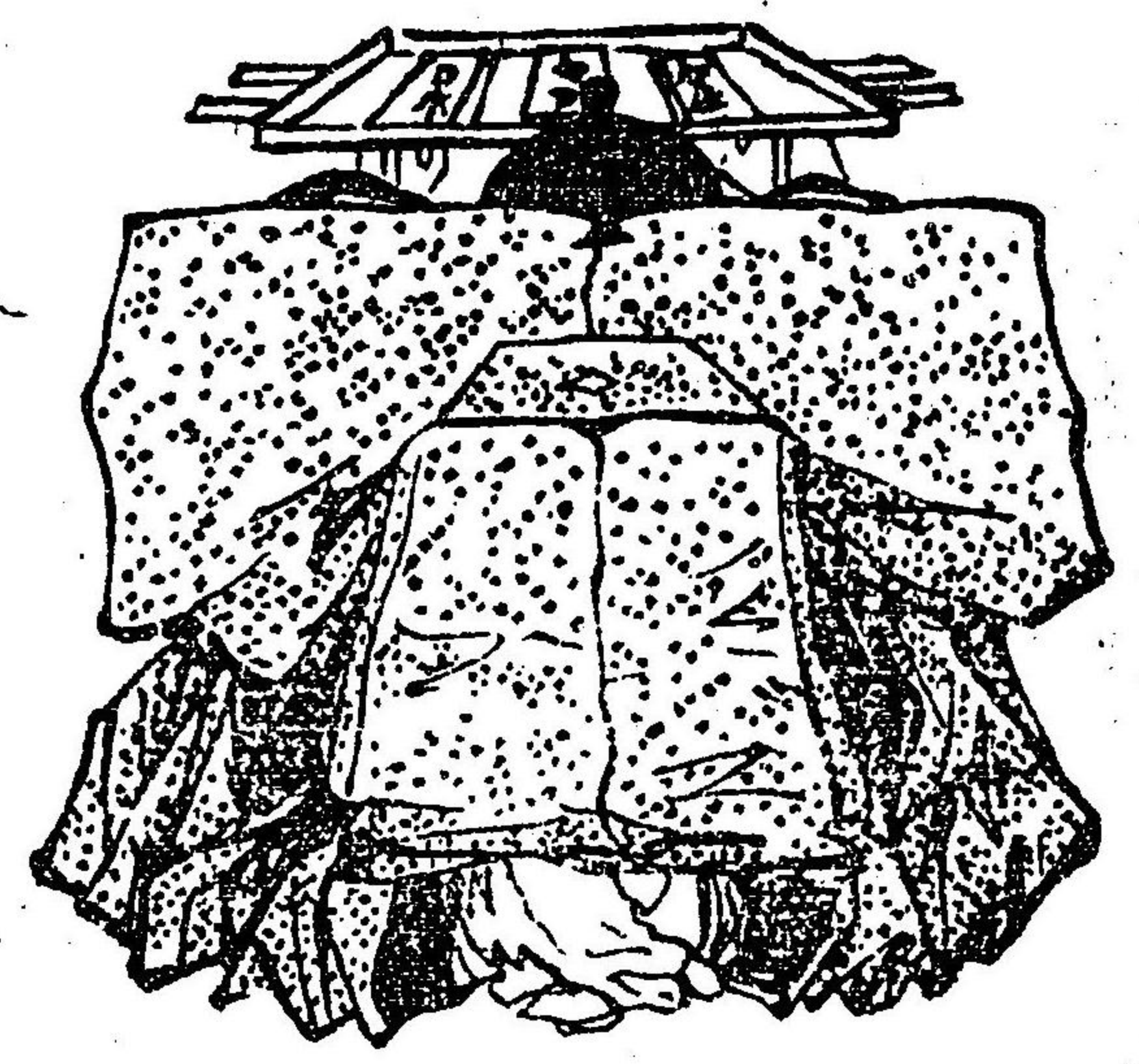
七におらま

ねえ

そきした

とま

あゝおらま



居所 下谷仲徒町二丁目三十五番地 東京銀座亭丁目
 号小羅浮舎主人 金衣散人 香雪山人 大庚山人 繪入新聞両文社々長

近世國學と以て鳴り前田夏蔭君の男ふり幼稚より其業ふ長じ
 漢籍と海保漁村翁の字び煎抹の茶と好む古筆の鑑定も明くあり
 當時了仲氏の門業多き中君が右ふ出づ者甚稀なりと夏蔭君曾て
 台命ふ依り編輯さき千島誌料の竣功と終ぐ物故さきたる君
 少年ながら其業と継ぎ整頓せし功と賞さき時服黄金若干と賜ひ世録
 百石と領し皇朝學と職務とせり太政維新の際人なりと官途ふ就べ
 勸むきと断然辞し萬巻の藏書と估却し商ふ帰て家号と梅
 屋と称し蓋慷慨不屈の氣象ありなり明治六年高田義甫氏が設立せし
 協力社貞と成て数部の雜書と編輯を君觀劇の癖ありて戲きふ作さる
 正本より最も賞さきものあり同八年繪入新聞社ふ入る初と續き物の
 長談と編み大ふ世評と得る今日の繁盛と極め日々二万五千余枚と販賣
 するふ至る全國の新聞中第一等の賣高とらふべし

末廣重恭

雪晨

獨怪夜來

寒氣加

紙窓一日

噪凍鴉

痴児啓戸

忙來報

籬外松篁

盡著花



居所 京橋區三十間堀町 京橋區銀座四丁目
 鐵腸居士 朝野新聞局長

行傳

豫州宇和島の産ふく衆不卓越するの識量自ら備りたまふ幼
 年修学し早く教員に列み加り廿才の時京都に出春日某氏
 に従く普く漢籍を渉り詩文を能く明治の初年石鐵縣の裁判官
 に任ぜらるるが幾程も略し辞して東京に來り大藏省出仕を拜せ同
 八年曙新聞社長青江君の招き應じ編輯長と成り堂々たる正論を
 述べ時々新聞条例出く禁獄二ヶ月の処分を受しより英名世に聞え
 當時日報社の編輯人末松謙澄君と併立し文壇社會に兩末の名何
 り后年朝野新聞社に入り法制官井上尾崎の二君と譏毀し成島柳
 北君と共に囹圄に繋ぎ君は主なるを以て八ヶ月に処せらるる放免後今
 時に至るまで自由の精神を論じて繞る近日府下及び近国より
 演説會に招待せらるる或は新橋の風月を戯きて甚だ多忙
 なりと聞たり

宇田川文海

三月

はせの情
 三月

三月
 いふせん

三月
 三月

三月
 とほせ

居所 大坂東區瓦町 大坂東區備後町二丁目
 号 除々庵主人又金蘭舎 魁新聞印刷長



下総国結城の人幼年出家して紫衣を纏ふの志と立んと江戸湯島切通
 一麟祥院の所化となり讀經の餘暇ハ雜學と好み神史と閱き一夜賊あ
 り兇器を携へて金銭の所を問ふ君幼弱ゆきどる義氣屈せざりて
 知らずと答ふ賊も住職の眠藏小案内せよと迫る依り師の難と救ん
 と欲しと賊有りくくと叫ぶ賊大に怒り憎き小坊主哉と罵り白
 刃を振て首を刎んとし過つて其腮小重傷を負い去る當時良医
 ぬきを以て遂に廢失となり經文と讀誦は事能くするが故に青雲乃
 意を断ち髪を蓄つて文壇に遊び同郷の人赤坂文平君が設立せし浪
 華新聞の編輯を助け後小坂新聞社に入り又魁新聞の印刷長
 と成り艶筆を振ふ加ふ小坂地の操觚者も乏しきが故に野史雜
 誌戯場評判記に至るまで皆君が手成さるもの稀なり實に明治
 の西鶴自笑と稱せし誣言ゆらば

忍峽稜威兄

史感

唯道老楠

先義舉

說空一死

七生辭

方今難計

真憂士

我慕櫻身

十字詩

居所 畠山縣下備中西原村 備前岡山
 号 竹墩
 好事雜報編輯人



好事雜報のの忠臣孝子義僕節婦の世に知らせざる履
 歴武將名僧文人の事蹟及び書画古器の類禽獸草木に至る
 まで普く其図を著し博物家の纂考といへば一種無類の雜誌なり
 君此編輯に従事し雅談を樂むが故に一面識るべき人君が
 行状必ぞ世塵を脱したる隱逸老翁の如く思へば然るに年齢
 未だ三十未滿たる愛國の熱心家より同縣々會議員となり方今
 の形勢に國會を開らざればあまべからざるの事情と人民の懇諭し遂
 小國會開設願望者總代として岡山を發するも臨みあの
 願意若政府に於て採用せらるれば再び帰らざると誓つて
 出發せしが願意を訴ふるの門なきを以て断念して帰路有
 馬の温泉に浴し世塵を清まし俗耳を洗つて眞に好事の騷
 客と成るとしり

田島象二

々様

遊女よりひふねとていやく

繩をひきまわす

たれと勅う

吹うる子

迷ふる子

片はみ



居所 神田區神田五軒町十六番地
 号 任天處士御門情人 行成山房 醉多道師

同樂相談幹事

宣化天皇の皇子惠波王の後胤ふし祖先ハ信州の豪士本姓ハ伊達とりふ如し
 て父と失ひ母み従つて京叡山北根岸の里に住し御行の松ふ登る蟬と追ひ螢沢み
 へく魚と釣つ遊戯自ら他の總角ふ優き英邁の氣頭了或人周旋し横山町
 三丁目の書肆和泉屋金右工門の丁推ならしり居ながら万巻の書ふ眼を晒し
 區々として商家に仕ふる大丈夫の爲野々らばと師ふ就て漢籍を熟讀し當時
 藤森大雅安井息軒先生等ふ愛さるの峻才ゆき尊攘の説を唱へて京師に
 走り浪士の群ふ入曾て和学を好むを以て多治比廬野と愛名し又或時ハ伊達
 律之助と称して宸賞を蒙りたりと示後城攝和泉の間と經歷せしが明治
 五年東京に歸つて武勇の念と断風流文壇に遊びて團々珍聞社負たりし
 り故りつて去て獨立し妙々雑粗同樂相談と著し就中滑稽ふ看客
 と絶倒せしめ又画と能くホソチを作る妙あり

中島勝義

失題
 成敗論人
 論豈公
 死生窮達
 有時同
 請見他年
 天定後
 忠臣
 逆臣中



居所 麹町區永田町二丁目 京橋區尾張町
 号 中洲醉人狩水漁長 近事評論編輯人

君ハ幕吏某の男ふして北海道石狩に産む少年英才の聞を所々評
 論新聞の記者となり議論條例に觸るるを以て禁獄に處せらるる満期後東京
 曙新聞の編輯長となり大坂に至つて攪眠新誌政談新聞を編輯し又
 演説會を開つて英名文壇社會を鳴らす時小坂地の豪商某氏君が峻亦
 感して学資及び衣食の料を充ふ惠を以て意馳つて遂に愛を失ひ
 藝州に下つて廣島新聞を助け明治十二年東京に歸り近事評論の記者
 と成りより其裝飾恰も商家の手代の如く木綿の服に紺の前垂と懸け
 府會の傍聴に臨むも洋服羽織袴の類は用ひず其行ひの非凡なる豈唯
 貧窶の爲のせむらんや其扮装ハ商人の如きハ心中尚書生の臭氣と
 脱せざるや國會の組立と題を一小冊と著し之が成法を非毀し國民法
 小導の儀を著す者と見認らる禁獄六ヶ月罰金五十円を申付ら
 せしむ実ハ明治十三年十一月十八日なり

栗本鋤雲

蝸牛

縁ル高ニ非ニ己カニ
 粘ス壁ニ固ヨリ其分
 不如蕉筈上
 悠々ト馬ニ篆文



居所 本所區北二葉町
 名ハ鯤 号宛庵
 郵便報知新聞印刷長

君ハ喜多村某の男幼ク幕医栗本瑞軒の養子トシテ名ヲ瀨兵衛トシテ
 昌平校ニ入テ字ト修ト當時醫師の子トシテ医業ト好ミ修者ハ御奉
 公願ヒテ称シ御番士ニ召出サセテ例々ト以テ良医ハ国ト治スル古語
 何カ区々トシテ治療ト事トせんヤト遂ニ蝦夷開拓ニ從事シ函館調
 役トシテ御目付ト務ル其後外国奉行ニ騰揚シテ安藝守ニ叙され禄八
 百石ト賜ヒ佛国ニ使シテ駐在スルニシテ数年初メ箱館ニ在リテ佛国ニ
 渡リテ其地味風俗政法人情等ト詳記スルニ乾菴十種トシテ隨筆アリ
 与明治維新ノ際巴里府ヨリ帰朝シテ示後官途ニ就キ報知新聞記
 者ト成テ小言ト述ルル好古ノ纂考ニ有益ナリ君本草学ニ長ト
 シ園中ニ四時ノ花卉ト培養シ詩ト作り酒ト飲ビ樂ビ々今世ニ陶
 淵明中ニ尋常書生上リノ操觚者流ト豈同日ノ談アリんヤ

高島藍泉

重陽山寺

也

筆純勢

心祝

後

居所 京橋區左所町壹番地 京橋區銀座寺下目
 名ハ政 号轉々堂主人足薪翁 讀賣新聞日就社印刷長



幕府の小吏より切名瓶三郎と稱し演劇を好み花柳を沈酔し所謂勞め
 嫌ひし遊蕩怠惰いふべからず故に同寮親戚不疎まき君更不意とせ
 慶應の初め画工と成り力食せんと実弟の家を継ぐに壯年よりして隱遁を君
 ハ画と松前の藩士高橋波藍に學び藍泉ハ則ち画名なり戊辰の役佐幕の士
 東北に脱し官軍に抗戦せんと欲まき銃器不之一時君憤然と起
 て名と政と改め陸軍奉行松平太郎君と謀り單身四方に馳り御用
 達する者と説諭し巨萬の金額を募集するに毫ル暴言剛強の氣を顯さず却て
 渠として落涙せしめ銃砲を函館へ廻漕せし諸道の脱兵潰ると聞くと大に落膽し
 再び画工と成り諸君と遊歴を明治五年日々新聞創立の際日報社に入ら編輯し
 從事し又繪入新聞を起しが社論の合さるより去て各社に聘され同十三年再
 び日就社に歸り君近頃近世古物と愛その癖ありと以て假名垣魯翁號ま
 ぬ元祿古器の精なりといへり

居所 麻布新堀町二番地学農社 京橋區竹川町
 号 学農山人 農學雜誌社長

津田 仙

偶感

一帯青山幽
 前人田地後人收
 後人收得休欣喜
 亦有收人後頭



天保八年下總佐倉小生初名仙也といふ才の時初江戶小出勉と蘭
 英の二書と學び頗る外国の事情に通じると以て幕府舉て外国裁りの官吏
 とし慶應の初年福澤諭吉小野友五郎君と共に軍艦を買入る爲に米國
 へ航し徳川氏瓦解の時其回復を謀つて新瀉小脱し屢々官軍に抗
 撃をせざる利はらば身と長等な脱き歸京して外客の通弁小雇を
 悟り所為つて農學志し明治八年政府の命を奉りて埃國大博
 覽會に派出し審査官と成り滞留する間彌農學を研窮し帰朝
 の後農業三事と著し津田繩と製して媒助の功を示す君幸ひ小
 一々萃族徳川侯に内縁ありて資本乏しからねば學農社の盛
 大に至り同年八月畏く聖上の内謁見を辱ふりて親く宸賞を
 蒙りといふ同九年農業雜誌を發兌し又開拓雜誌を出版し國
 の廣益を期すもの君より大なるのねりといふ

成島柳北

墨水

梅穉塚前

詩一囊

牛神祠畔

酒千觴

過門不入

已三日

遷上爲花

來往忙

居所 府下須寄村百十六番地 京橋區銀座四丁目
 号 遷上漁史 何有仙史 朝野新聞社長



寄丁專

歴代徳川麾下の儒家ありて有名なり成島司直君の男初め甲子太郎
 と幼年より讀書の傍ら雅談を喜び古器古銭を愛する癖あり青年古
 命に依りて國史を編纂す此時に當りて外客初に渡來し攘夷鎖國の論紛
 らんとて決せざると歎し屢々建言するもの一も採用せらるる狂詩を作そ
 幕府の因循やを詭しつゝ遂に免職の久し五十日の閉居を命ぜらるる慶喜公將
 軍の職を襲ふ及んが君と騎兵頭を撰擧し佛式の練兵を監督させ又外國
 奉行とて大隅守を叙す時内外甚多事財政困難なりと以て君が會計
 の大任を擔りしむ戊辰の春王師品川駒迫るる際一幕吏城中に會して
 降戰の論區々ありて決せん君其情弱弱と見し語るる不足らんと覺り憤
 然とて家へ歸り速く歸農し再び官途を就く事望まず淺草本
 願寺中の學校を開き法主大谷君に從つて歐米各國を遊び到る所其國
 語と畧通辨せし英敏秀才驚く一帰朝の時萬國の古銭を齎し來つて
 愛玩せしと人々の請求をまはし君忽ち諾し數百圓の大利を得しむ
 即日柳橋を遊んぐ一夜の愉快を散せし其淡薄なる想ふべし明治七
 年報知新聞を助け又公文通誌を入り朝野新聞を改題し今日の衆と
 かりの君が雜録の洒々落落たる中真味ありて因て明り明治九年法制官
 を諷駁し禁獄四ヶ月を処せし芳名弥高く傍ら花月新誌を編輯し
 て兩社長と兼商法會議所の議員となり又貯蓄銀行の發起人たり噫昔
 時ハ鞭を揚ぐ千軍万馬を指揮し今日ハ筆を採り千変万化の才あり
 墨江の花を愛し鴨東の月を樂む風流の行ひ曾々著りたる柳橋新
 誌京猫一班新橋情話等を見し知る不足

新聞記者奇行傳初編早

明治十三年十二月十六日 御届
同 十四年一月二日 出板

新聞記者奇行傳

二編 三編
四編 五編

近刻

小梅村三百三拾五番地

定價二十錢

畫工

鮮齋 永濯

京橋區疊町拾七番地

編輯兼
出板人

細島晴三

開明
小説

春雨文庫

第四編より 近世の烈婦孝女乃傳説を
引續き出版 記しる面白き珍書あり

松村春輔編輯

復古夢物語

初編より
八編まで 出版

建久明治太平記の前編より嘉永
六年里米利が使節相冊浦賀へ來船
以來明治元年伏見戦争迄安
きに面白き書也

和田定篤編輯

参考鹿兒島新誌

半紙本
初編より七篇
迄全部十五冊

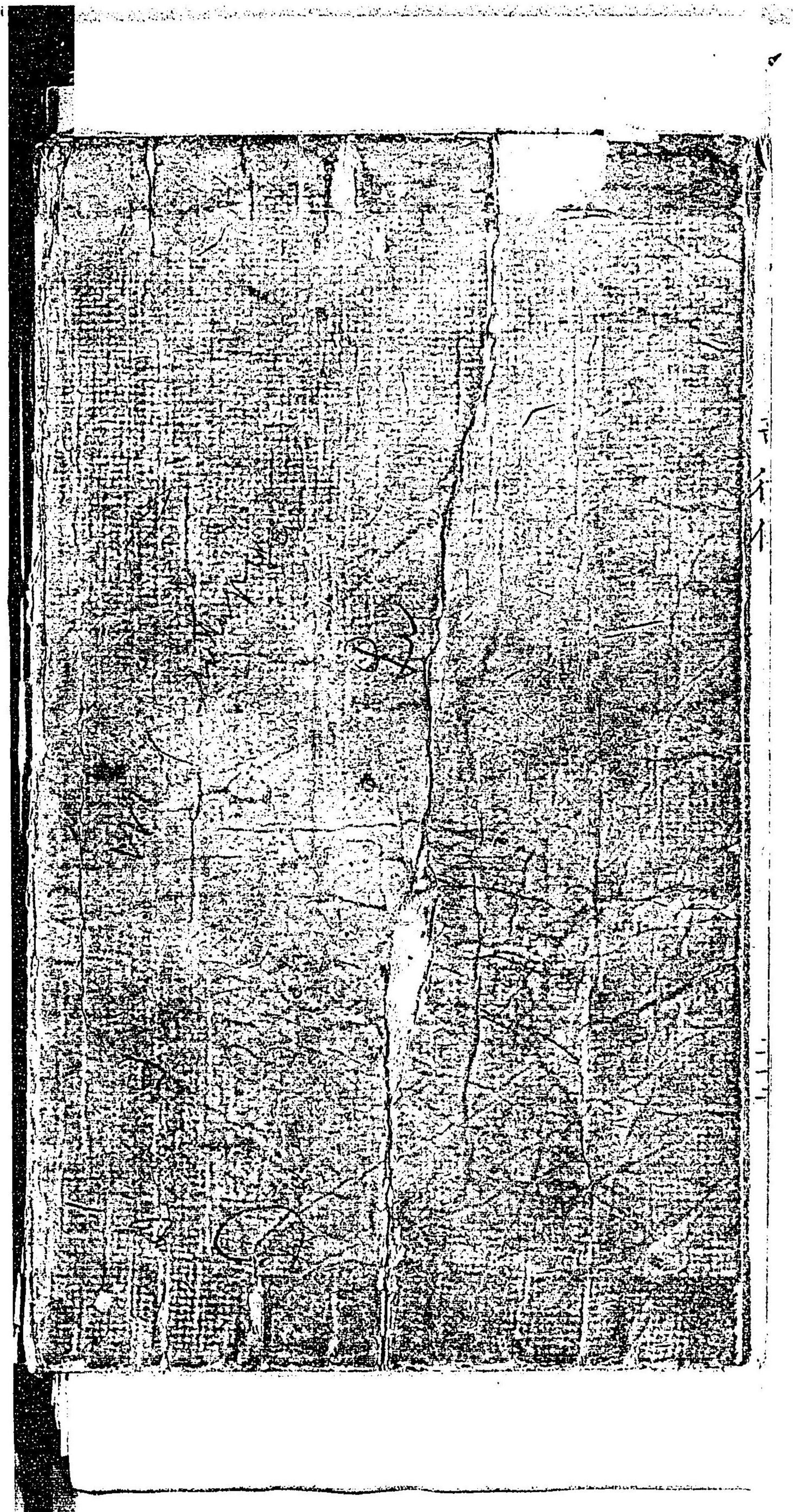
此書西国征討の始末を詳細に
記し第一の記録なり

東京書肆

大島屋

弥生門町上二番地

日專石衛門



特 54

152

館
函
架
號

- 新聞記者奇行伝 目次			
九	四		
五	五	五	
冊	號	架	函

004612-000-2

特 54-152

新聞記者奇行伝

隅田 了古 / 編

M14

ACE-1213

